The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジャーエスィー作『パドマーワト』賛美の章
Author(s)	喬, 美瑩
Citation	印度民俗研究. 2017, 16, p. 57-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60689
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ジャーエスィー作『パドマーワト』

賛美の章

喬　美瑩

解説

15 世紀末から 16 世紀にかけて北インドにおいて、スーフィー詩人として活躍したマリク・ムハンマド・ジャーエスィー(Malik Muhammad Jāyisī)の著書である『パドマーワト』(*Padmāvat*)は、ヒンディーの恋愛詩文学においての傑作の一つとされ、その物語は多くの研究者達によって研究されてきた。しかし、主として研究対象とされているのは、その序章を除いたメインのストーリーである恋愛詩の部分である。そこで、本稿では『パドマーワト』の序章「賛美の章」を日本語に翻訳紹介する。なお、「賛美の章」は 4 つの部分から構成されている。第 1 部分は第 1 篇から第 12 篇までであり、主に神による天地創造の過程を述べている。次の第 2 部分は第 13 篇から第 17 篇までであり、インドのスール朝の皇帝であるシェール・シャーに対する賛美が述べられている。続く第 3 部分の第 18 篇から第 22 篇では、ジャーエスィーが師事したスーフィーの導師達や、ジャーエスィーの友人及び自分自身について述べられている。最後の第 4 部分は残りの第 23 篇と第 24 篇である。この部分では、「賛美の章」に対する締め括りが記されており、同時に『パドマーワト』のメインストーリーに対する前置きである。

マリク・ムハンマド・ジャーエスィーの宗教観

スーフィズムとはイスラーム内部に発展した神秘主義のことを指す。神を完全で超越的な存在としてとらえるイスラーム教に比べて、スーフィズムにおいては神を隔離した存在としてとらえてはいないという。スーフィーたちは形式的な信仰を排除し、世界に真に存在する神と自己との合一を目指して、自己を消滅させる修行を行い、修行のために信者たちは禁欲生活を行う。神は求道者の恋の対象となり、両者の関係は愛の関係として捉えられる。13 世紀前後から、イスラーム世界内ではスーフィー教団が多く発展した。ジャーエスィーは自作の中で、チシュティー教団に入団していたと述べている。

『パドマーワト』の序章において、ジャーエスィーが描いた創造主による天地創造から反映される彼の宗教観は、スーフィズム、イスラーム教、ヒンドゥー教の中の、どれか一つだけに限定されているわけではない。「創造主」の存在がイスラーム教における唯

一神のように、具現化できない超越的なものとして描かれているが、一方で彼によって創造されたこの世界には「ヴィシュヌ神」や「ナーガ神」のようなヒンドゥー教の神も混在している。そしてジャーエスィー自身はスーフィー導師の導きにより、神、つまり「創造主」との合一を目指すスーフィーとしてこの世で生きている。創造主が創造した複数の宗教要素から構成された世界観こそがジャーエスィーの宗教観そのものであると言えるのではないだろうか。ヒンドゥー教が主流であるインドで育ったジャーエスィーの思想からその影響を完全に排除することはできないために、イスラーム教の流派であるスーフィズムを信仰していてもなお彼が描いた世界にヒンドゥー的要素が見られると考えられるだろう。またジャーエスィー自身がこのようなヒンドゥー教的な要素を敢えて排除することなく使用したことから、異なる宗教に対しての寛容的な態度を感じ取ることができ、それらを一つの世界において共存させようとした彼の宗教観が『パドマーワト』の序章に反映されていると言えるのではないだろうか。

第１部分（第１篇～第１２篇）
創造主による天地創造

第１篇

① まず初めに、私は一人の創造主を心に留めている。彼は命を授け、そしてこの世を創造した。
② 最初に彼は光を生み出し、そして次にカイラーサ山をつくった。
③ 彼は火、空気、水そして土、これらの四元素をつくり、さらに様々な色を生み出した。
④ 彼は大地をつくり、そして天界と地界をつくった。そして、その中に多くの人間をつくった。
⑤ 彼は宇宙の中に七つの大陸をつくり、そして大地を十四に分けた。
⑥ 彼は昼のために太陽をおき、夜のために月をおいた。そして星々のためにそれぞれが進むべき軌道を定めた。
⑦ 彼は日光を生み出し、一方で寒さと影をつくった。そして雲を浮かばせ、その中に雷をつくった。
⑧ このような全てのものを創造したかたは、彼をおいて他に誰もふさわしくない。
⑨ ここから、彼の御名のもとに、この壮大な物語を語ろう。

第２篇

① 彼は雪と無限に広がる海をつくった。そしてメール山とキシュキンダー山をつくった。
② 彼は河を流れさせ、泉を湧かせ、その中にワニと色々な魚をつくった。
③ 彼は真珠で満たした貝をつくった。そして汚れのない石もつくった。
④ 彼は森をつくり、その中に薬草をつくった。また、オウギヤシやナツメヤシのような最良の木もはやした。
⑤ 彼は森に住む野生の動物をつくり、行きたいところに飛ぶことのできる鳥もつくった。
⑥ 彼は黒と白の色をつくった。また、空腹と睡眠と休息をつくった。

⑦ 草木、花が開くことで喜びを生じさせた。また彼は薬をつくる一方で、病もつくった。
⑧ 瞬きをする間もなく、彼はこれらのすべてを直ちに創造した。
⑨ そして彼は柱や支えるものなしで、無の中に大空を浮かばせた。

第３篇

① 彼は人間をつくり、[その人間に]偉大さを与えた。そして、人間のために食べ物となる穀物をつくった。
② 彼は王をおいて、その王は自分の王国を支配した。また王の富として、象と馬をつくった。
③ [創造主は]王のために多くの贅沢なものをつくった。また、主人をつくると同時に奴隷もつくった。
④ 彼は富をつくり、富から誇りがうまれた。また彼は欲望をつくり、[そのせいで]全く満足することはなかった。
⑤ 彼は常に誰もが欲っする命をつくった。また、死をつくり、誰もそれから逃れることはできない。
⑥ 彼は、喜び、楽しさ、嬉しさをつくった。それと同時に、悲しみ、不安、そして争いも生じさせた。
⑦ 彼は乞食をつくり、裕福な人もつくった。彼は繁栄をつくり、そして多くの災難もつくった。
⑧ 彼は弱い者をつくり、強い者もつくった。
⑨ 彼は土から全てを創造し、また全てを土へ還らせた。

第４篇

① 彼は沈香、麝香、ベチバーおよび竜脳と樟脳をつくった。
② 彼は蛇をつくり、その口の中を毒で満たした。そして[蛇に]噛まれた毒を取り除くための呪文もつくった。
③ 彼は不死の薬をつくり、それを飲むことで命は保たれる。また反対に、それを飲むことで死をもたらす毒もつくった。
④ 彼は、甘い汁で満たされたサトウキビをつくった。そして果実が多く実る苦いビワモドキもつくった。
⑤ 彼は花の蜜をつくり、それに蜜蜂が集まるようにした。そして、スズメバチ、蛾、鳥をつくった。
⑥ 彼はキツネ、ネズミ、そして蟻をつくった。また、土に穴を

掘って暮らす多くのものもつくった。
⑦ 彼は、鬼、幽霊、悪霊をつくり、悪魔と魔天もつくった。
⑧ 彼は様々な生き物をつくり、また 18000 種類もの生き物を創造した。
⑨ 彼はこのように全てを整え、全ての生き物に食べるものを与えた。

第 5 篇

① 彼はまさに富の主である。宇宙は彼のものであるからだ。彼は全てを毎日与えつづけているが、彼の貯蔵庫は尽きることはない。
② この地球上全ての生き物に、そう、象から蟻まで、彼は昼夜絶え間なく食物を分け与えている。
③ 彼の目は全てを俯瞰し、友も敵も忘れていない。
④ 鳥もキリギリスも、彼は忘れていない。たとえそれがどんなに遠くにあろうとも、目に見えても、見えなくとも。
⑤ 彼は多くの種類の食べ物をつくり、全ての者にそれを与えたが、彼はそれらを少しも口にすることはなかった。
⑥ 全ての者に食べ物と水を与える、このことが彼の糧となっている。
⑦ 呼吸するたびに全ての者は彼に希望を寄せるが、彼は誰にも期待することなく、失望することもない。
⑧ 長い時の中で彼は与えつづけているが、底を突くことはない。彼は自身の両手でこれらを創造した。
⑨ この世で他の者が与えるものはすべて、彼[創造主]が[本来]与えたものである。

第 6 篇

① 初めに、かの偉大な君主について語ろう。その創造の初めから終わりまで、彼の統治は壮麗である。
② 常に、いつの時代も統治し、彼は望むものに国を与えてきた。
③ 彼は貴族の傘（特権の象徴）を取り除き、[平等を得られるように]貧しい人々に傘をかけた。しかし、彼自身と同等の立場にいる者は他に誰もいなかった。

④ すべての人は彼が山（不幸の象徴）を砕き、蟻に象のような力を与えるのを見た。
⑤ 彼は金剛石を藁にして砕いた。藁を強靭にし、[重さに耐えられるような]威力を与えた。
⑥ 彼がしたことを誰も知らない。彼は心に思い浮かんだことをする。
⑦ 彼はある者たちには幸せと食べ物と喜びを与え、またある者たちを世の中の物乞いにし、辛い悲しみを与えた。
⑧ すべてのものは実体のない存在であり、彼の行うことだけが不変の真理である。
⑨ 彼は一つのものを作ってはそれを壊し、そして欲しくなればまた再び創造するのである。

第 7 篇

① その創造主は誰からも見られることはない。彼は形や色を持ち合わせていない。彼は全てのものの中に存在し、全てのものは彼の中に存在する。
② 彼は明らかな存在であり、隠された存在でもある。敬虔な者だけが彼を見分けることができ、罪深い者は彼を見ることはできない。
③ 誰も、彼の子供ではなく、父や母でもなく、彼に家族はいない。そして彼と関係がある者もいない。
④ 彼は誰かを自身の体から産み出すことはなく、誰かによって産み出された存在でもない。しかし、これまでの全てのものは彼が創造したものである。
⑤ 全ての個は彼が創造したのである。彼は誰かによって作り出された者ではない。
⑥ 彼は始まりから存在し、今もそこに存在している。そして全てがいなくなっても、彼だけは存在しつづける。
⑦ そして長く生きることを自惚れる者は、頭がおかしく目が見えない。何故ならば、4 日もすれば、その者は生業を営み、亡くなるからだ。
⑧ 彼は自分が望んだことをした。彼は自分が望むことをする。
⑨ 誰も彼を止める者はいない、彼は自分が望むとおりに全てに命を与える。

第 8 篇

① このような方法で彼の姿を見分け、そして聖典の中で書かれたように、彼の姿を認識するのだ。

② 創造主は命を持たないが、彼は生きている。彼は手を持っていないが、すべてを創造した。

③ 彼は舌を持っていないが、すべてを語る。彼はすべてを動かす体を持っていないが、彼は動いている。

④ 彼は耳を持っていないが、すべてを聞いている。彼に心はないが、すべてのことを考えている。

⑤ 彼は目を持っていないが、すべてを見つめている。いったいどのようにしてこのような創造主を見分けることができようか。

⑥ 誰も彼のような姿の者はいないし、彼も誰とも似ていない。彼はこのような無二の存在である。

⑦ 彼はどの場所にもいない、しかし彼が存在しない場所もどこにもない。彼には形も輪郭もない、このように彼は純粋である。

⑧ 彼は交わらず、離れない。このようにして彼はすべての中に存在している。

⑨ 真理を悟る者は彼に近いが、盲目で愚かな者は彼と離れている。

第 9 篇

① そして、心が単純である者は、創造主が与えた比類ない至宝の奥義を知らない。

② 彼は[我々に]舌を与え、それによって味覚と喜びをもたらした。また、微笑みに良く似合う歯を[我々に]与えた。

③ 彼は、この世界を見るために[我々に]目を与え、言葉を聴くために[我々に]耳を与えた。

④ 彼は言葉を発するための喉を[我々に]与えた。彼は[我々に]手の指と素晴らしい腕を与えた。

⑤ また、我々に歩くことができる比類のない足を与えた。これら全ての偉大さを知るのは、これらを与えられていない者である。

⑥ 若さの秘密を知るのは年老いた者である。若さを探し求める時には、もうそれを手に入れることはできない。
⑦ 王は幸せの本質を知らない。しかし悲しみを知る貧しい者はその本質を理解する。
⑧ 健康な体の価値を知るのは病人である。一方で健康な者は何にも気を遣わずに生きる。
⑨ 全ての本質を知る創造主は万人の心の中に存在する。

第 10 篇

① 創造主は非常に多くのものを創造した。言葉で表現しようとも、それを説明することはできない。
② たとえ 7 つの空を紙でつくり、大陸の 7 つの海にはインキを満たし、
③ この世のあらゆる森やハナモツヤクノキの枝、髪と毛と鳥の羽、
④ 砂や塵埃、雲の中の雫や空の星々、
⑤ これらを全て筆に変えてこの世界を描こうとしても、無限の海のような[創造主の]行いを描くことはできない。
⑥ 彼は自身の永遠なる性質を私達に示した。今でも海の水滴は一滴も減っていない。
⑦ しかし、これを認識することで心の中に驕りが生まれることはない。心に驕りが生じる者は狂っている。
⑧ 創造主は多くの性質を持っているお方である。彼は気の向くままに自身が望むものになる。
⑨ また、創造主は一人の人間をつくった。その人は自ら善行を多くおこなった。

第 11 篇

① 彼は汚れのない人を創造した。その名はムハンマドであり、まるで満月の相のようであった。
② まず初めに創造主は彼に輝きを与え、次に愛情を持って万物を創造した。
③ 創造主はこのように灯火（＝ムハンマド）をこの世に与え、[その輝きによって]明るくなり、世間は道を見分ける。

④ もし彼のような輝く人が生まれなければ、暗闇で道を見極めることはできない。
⑤ その創造主は別の場所に[教えを]書き記した。教えを学ぶものは信徒となった。
⑥ 創造主は[ムハンマドを]この世においての自身の使徒にした。そしてその名を唱える者は二世において救済を得る。
⑦ 生きている間に彼の名を唱えなかった者には地獄に場所を用意した。
⑧ [世界の終焉の審判の時、]創造主は各々の善と悪を問う。
⑨ [その時、]ムハンマドは主の前に進み出て懇願し、この世を救済する。

第 12 篇

① ムハンマドには 4 人の友 [1]がおり、彼の後継者でもあった。その 4 人の名はこの世とあの世の両方において汚れのないものである。
② [彼らの中で最も]賢い者はアブーバクル・シッディークであった。彼は最初にこの世に信仰をもたらした存在である。
③ 彼の後、ウマルはカリフの称号で飾られた。彼がその信仰を受け入れた時、世の中に公正がもたらされた。
④ その後、博識な賢者であるウスマーンは、聞いたアーヤト（一節）を基にしてクルアーンを制作した。
⑤ 4 番目のアリーは獅子のように強い人であった。彼の前ではどのような戦士でも彼に立ち向かうことはできない。
⑥ 彼ら 4 人の心は一つであり、堅く約束を守り、同じものを信仰し、同じ団体に属している。
⑦ それぞれは同じ真理を説き、その真理は証拠となり、二世で読まれる。
⑧ 創造主が贈ったクルアーンという書は万人に読まれる。

---

[1]本篇で登場する 4 人、アブーバクル（在位 632～634）、ウマル（在位 634～644）、ウスマーン（在位 644～656）とアリー（在位 656～661）はすべて歴史上実際に存在していたカリフである。神の預言者であるムハンマドの死後、その後継者としてカリフと呼び、正統カリフ時代に入る。

⑨ そして[行くべき道に]迷い彷徨う者は、これを聞くうちにその道に戻る。

第 2 部分(第 13 篇～第 17 篇)
シェール・シャーへの賛美

第 13 篇

① シェール・シャーはデリーのスルタンであり、まるで太陽のように周りを照らした。
② 天蓋や玉座も彼にはふさわしかった。他の王たちも全て彼の前にひれ伏した。
③ 彼はスール朝の英雄であり、戦において勇者であった。彼は非常に賢く、才能あふれる人であった。
④ 彼は 9 つの地域の王をそれぞれ破った。そして 7 つの大陸の支配者は彼の前で頭を下げた。
⑤ 彼は自分の剣の力で、領土を獲得した。アレキサンダー大王、またはズルカルナインがしたように。
⑥ 彼の指にはソロモン王の指輪（知恵）がある。彼はその手で世の中に暮らしを与えた。
⑦ 彼は非常に偉大な王であり、この大地を支えており、すべての創造を支えている。
⑧ ムハンマドは彼に祝福を与える。この地を長く統治するように、と。
⑨ お前はこの大地の王であり、この大地がお前を必要とするように、と。

第 14 篇

① 私はスール朝のこの大地の王について語ろう。彼のその装い(軍備)は、大地でさえその重さに耐えることができない。
② 象や馬、歩兵などの彼の軍隊がこの大地で進むとき、山は砕け砂塵となって飛び散る。
③ その砂は太陽を覆い隠し、[大地に]夜が訪れる。[夜が来たと勘違いする]人々や鳥たちは家に帰り眠りにつく。
④ 砂は上へ舞い上がり空が覆われる。[結果、]6 つの大地が置か

れ、空は 8 つに分かれた。
⑤ 空は揺れ始め、インドラ神は恐怖で震えた。ワースキ蛇神は地界に逃げて引きこもってしまう。
⑥ メール山は沈み始め、海は干からびて、森は砂と混ざる。
⑦ 軍の先鋒隊は[行く先で]水や草の一部を得ることはできるが、後衛の軍は泥さえも十分に手に入れることができない。
⑧ ⑨この大地の主、この世の比類なき英雄であるシェール・シャーが戦争を始めると、今まで決して破られなかった城塞も彼の前では砕けてしまう。

第 15 篇

① シェール・シャーの正義について語ろう、それが如何にこの世を満たしているのかを。地を這う蟻さえをも悲しませない。
② 正義王と称えられたアヌーシールワーンでさえも彼の正義の強さに敵わない。
③ 彼はウマル [2]のように正義を行った。このため彼は世間で有名であった。
④ 道に鼻輪が落ちていても誰もそれに触れることはない。人々は道に金を放りだすのである。
⑤ 牛と虎は同じ道をゆっくりと一緒に歩み、そして共に一つの浅瀬で水を飲む。
⑥ 彼は自分の宮殿にあふれる牛乳と水を濾過し、両者を別々に分ける [3]。
⑦ 彼は公正な裁きをし、真実を語り、そして弱者も強者も同じように守る。
⑧ この大地のすべての者は、手を合わせて彼を祝福する、
⑨ ガンジス河とヤムナー河に水が流れる限り、彼の頭上が永遠であるようにと。

第 16 篇

① また、シェール・シャーの姿の美しさをどう説明しようか。この世の全ての者が彼の顔を一目見たいと切望している。

---

[2] 第 12 篇③に記されたウマルを指す。
[3] 厳正な裁きの意。

② 創造主はこの世に満月をつくったが、彼の美しさは満月よりも輝いている。
③ 覗き窓から彼の姿を見れば、その身にある罪は消え去る。世の者は彼を敬い、彼を祝福する。
④ 彼はまるで太陽のようにこの世を上から照らす。すべての姿は彼を前にすると隠れる。
⑤ スール朝において、彼はこのように太陽よりも 10 倍美しく、汚れのない存在である。
⑥ 誰も面と向かって彼を見ることはできない。彼を見る者は[自ら]頭を下げる。
⑦ その容貌は日々美しくなっていく(前日の 1.25 倍ずつ美しくなる)。創造主はこの地で彼を誰よりも美しくつくった。
⑧ 彼の美しい頭の上には宝石が光輝き、月がかけ、彼が満ちるようである。
⑨ 彼を見たいと魅了された者は立ち上がり、彼を讃える。

第 17 篇

① また、創造主は彼を慈善的な人にした。これほどの喜捨をこの世で誰もしていない。
② バリ王とヴィクラマアーディティヤ王は気前がよく寛大であり、ハーティム・ターイーとカルナは献身的であると言われる [4]。
③ しかし、[この中で]誰もシェール・シャーに勝る者はいない。海の宝石、メール山の金は彼の布施により毎日減っていった。
④ 彼の王宮では布施の太鼓が鳴り響き、その名声は[太鼓の音と共に]海の向こうまで広がった。
⑤ 金の雨が降るという噂が世間に広まった。貧困は他国へと去っていく。
⑥ もし[彼のところへ]行って願えば、その者は一生裸と空腹になることはない。

---

[4] バリ王、ヴィクラマーディティヤ王、カルナともに、ヒンドゥー神話で知られる王であり英雄。ハーティム・ターイーは、6 世紀のアラブの王子。

⑦ 10 頭の馬の犠牲祭の供儀をしようとも、[シェール・シャーの]与える物や功徳とは比べものにならない。
⑧ スルタン・シェール・シャーとして、このように慈悲深い方がこの世に生まれた。
⑨ 彼のような者はこれまでおらず、これからも現れず、現在も誰も彼のような与える者はいない。彼はこのような贈り物である。

第 3 部分(第 18 篇～第 22 篇)
スーフィー導師と友について

第 18 篇

① サイヤド・アシュラフは私が好むスーフィー行者(ピール)であり、彼は私に輝かしい道を与えてくれた。
② 彼は私の心の中に愛の灯を点してくれた。それが発する光によって私の心は清らかになった。
③ 私の道は何も見えない闇であった。そこに光が差し、すべてを理解することができた。
④ 私の罪は[私を]塩辛い海に沈めた。彼は[私を]弟子にし、信仰の小舟に載せてくれた。
⑤ 彼は私の舵をしっかり握り、私と彼が出会った岸辺のガートまで連れて行ってくれた。
⑥ 彼のような舵取りを持つ者は、すぐに渡ることができる。
⑦ 彼は手を掴んで助けてくれる人で、水が深いところで手を差し伸べる苦難の時の仲間である。
⑧ 彼はジャハーンギール・チシュティー[5]に由来し、月のように純潔である。
⑨ 彼はこの世の主であり、そして私は彼のもとの奴隷である。

第 19 篇

[5] Makhdoom Sultan Syed Ashraf Jahangir Semnani (1287 – 1386 CE): スーフィー聖者。

① 汚れのない宝石であるハージー・シャイフがその家に生まれ、彼は幸運に恵まれている。
② 創造主は道を示すための二つの輝く灯火をその家に作った。
③ ムバーラク・シャイフは満月のようで、カマール・シャイフはこの世において汚れがない。
④ 両者は北極星のように動じず、揺れることはない。メール山やキシュキンダー山よりも高い所にいる。
⑤ 創造主は彼らに輝きと美しさを与えた。彼らはまるで創造主がこの世を支えるためにつくった柱である。
⑥ その２本の柱の上に創造主はこの大地の全てを置いた。彼ら二人が重さを支えることで、万物は安定を得た。
⑦ 彼らを見て、そしてその足に触れた者は、その身から罪が消えて清らかになる。
⑧ ムハンマドは言う、師と聖者とともにいる者は道中で安心を得ると。
⑨ 舵取りと漕ぎ手のいる船は、すぐに岸に到達することができる。

第 20 篇

① 師のマフディーは舵取りである。そして私は彼に仕える（弟子)。彼が漕ぐ船は速く進む。
② シャイフ・ブラハーンは彼に道を示した師匠である。ブラハーンは彼を道に導き、知識を授けた。
③ ブラハーンの優秀な師はアルハダードである。彼はこの世とあの世（精神世界）において尊敬され、光輝いている。
④ 彼はシャイフ・ムハンマドの弟子であり、人は彼と付き合うことを喜んだ。
⑤ 彼には師のダーニヤールが道を示した。ハズラト・ハージャー・ヒズルに出会った。
⑥ ハージャー・ヒズルは彼を気に入り、サイヤド・ラージーの元へ連れて行って会わせた。
⑦ 師のマフディーから、私は[徳ある]行いを学び、私は舌を動かし愛の詩を語った。
⑧ 彼はそのような私の師であり、私は弟子である。毎日、私は彼の元に仕えて懇願する。

⑨ 師のおかげで、創造主を拝むことができるように、と。

第 21 篇

① 目が一つしかなくても[我]ムハンマドは詩をつくる。その詩を聞く者はそれに魅了された。
② 創造主は、この世を月のようにつくり、斑点も与えた。しかしそれは光り輝いている。
③ 星々の中央にまるで金星が現れるように、片目で[私は]この世に現われ、[すべてを]理解した。
④ マンゴーは棘のある花房ができない限り、香ることはない。
⑤ 創造主は海水を塩辛くした。その一方で海は限りなく無尽に広がる。
⑥ メール山はシヴァ神の三叉戟によって破壊された。しかしそれは金の山となり、天高く聳え立つ。
⑦ 壺に汚れが付かない（焼かれない）限り、焼かれないものに金色の光沢は現れない。
⑧ 詩人のその一つの目は鏡のようであり、その心は清らかである。
⑨ すべての美男子は[私の]足に触れて、[私の]顔を見ることを望む。

第 22 篇

① 詩人ムハンマド（・ジャーエスィー）は 4 人の友人を得た。彼らと友情を結び、自身と同等に扱った。
② ユースフ・マリクは学者である。彼は誰よりも先に奥義を知った。
③ 次にサラールは殺戮願望の強い人である。彼の腕は常に剣と喜捨に振るわれる。
④ [3 人目は]ミヤーン・サロンである。彼はライオンのように大変勇敢である。戦場で刀を持って戦う。
⑤ [4 人目は]偉大なシャイフである。彼は偉大な賢者と言われる。実にシッダたちは礼をして彼を認める。
⑥ 4 人は 14 の学問を学ぶ。創造主は彼らを友人にした。
⑦ 白檀の樹の近くに植えられた樹は白檀の香りに染まり、白檀になる。

⑧ この 4 人の友はムハンマド（・ジャーエスィー）に出会い、彼と同じ精神を持つにいたった。
⑨ この世で一度彼と親しくなると、あの世でさえ[彼から]どうして離れられようか。

第 4 部分(第 23 篇、第 24 篇)
本編の物語に対する前置き

第 23 篇

① ジャーヤスという町は聖なる地である。そこで私はこの詩を著した。
② 私は学者たちに繰り返し懇願する―この詩に欠点があればそれを正し、輝きを加えてください。
③ 私はすべての詩人たちの後を行く。進軍太鼓が鳴ると、私は[自身の詩を]少し詠みながら歩を進める。
④ 私の心は蔵である。その中には宝石が蓄えられている。[それを]私は[自身の]舌という錠前の鍵で開けた。
⑤ その舌はラタンセーンとパドマーヴァティーを歌い上げる。その中には味わい深い比類ない愛の蜜が満ち溢れている。
⑥ 恋人との別れの痛みを言葉で語る者にとって、空腹や眠りは何になるというのだ。
⑦ 彼は装いを変えて苦行者となる。まるで泥にまみれた宝石のように隠れて。
⑧ [我が名は]ムハンマド。この身には、血も肉もなく、愛の詩人である。
⑨ [私の]顔を見る者は嘲笑するが、[私の]詩を聞く者は涙ぐむ。

第 24 篇

① それはヒジュラ暦の 947 年（西暦 1520 年）のことである。この物語の最初の言葉を詩人[ジャーエスィー]が語ったのは。
② シンハラ島にパドマーヴァティーという名の王女が居た。彼女をラタンセーンはチットール城へ連れて行った。
③ デリーのスルタン、アラーウッディーンにラーガヴァ・チェータンは[彼女の美しさを]話した。

④ 王はこの話を聞くと、城を包囲し、ヒンドゥーとムスリムの戦争が起こった。
⑤ 初めから終わりまでこの物語を言葉にして、チョーパーイー韻律で語る。
⑥ 詩人と語り部は[愛の]ラサで満たされた椀を持っている。遠くにいても、[詩を味わうことができる者にとって]それは近いが、[味わうことができない者にとって]近くにいてもそれは遠いものである。
⑦ 近くにいても遠いとは、まるで花とその棘のようである[6]。遠くても近いとは、粗糖と蟻のようである[7]。
⑧ 蜂は、遠い森からやってきて蓮の香りにたどり着く。
⑨ しかし[池に住む]蛙は、たとえ近くにいてもその香りを感じることはできない。

使用テキスト

Agravāl, Vāsudevśaraṇ. 2000 [1961-1962]. *Pdmāvata: Malika Muḥammad Jāyasī kṛta mahākāvya, mūla aura sañjīvanī vyākhyā*, Jhāṃsī: Sāhitya Sadan.

参考文献

ティエリー・ザルコンヌ　2011 『スーフィー イスラームの神秘主義者たち』大阪：創元社

[6] 棘は花やラスの美しさとはかけ離れている、という意味。
[7] 遠く離れていても、蟻は粗糖を見つけることができる。